

富士山が噴火したら?!

災害ボケと原発再稼働、「災間」に減災を考える

一地球市民の書棚から②

地球市民 大村 昌宏



美しい富士山、新幹線で通るたびに「今日は見えた」と一喜一憂します。しかしこの富士山が噴火したら?!と思うのは杞憂だろうか。富士山は噴火する。これは想像の世界ではなくリアリティのある話なのだ。富士山は火山の年齢でいえば、まだ青年期。最後に噴火したのは、三百年前の1707年。次の噴火は迫っている。しかも地球科学の進歩で、富士山の噴火は、東海・東南海の巨大地震と連動していることが分かってきた。巨大地震と津波、そして富士山の噴火、想像してみただけでもぞっとする。これが「美しき日本」列島に住まう者の宿命のようだ。なぜ起きるのか、何が起きるのか、どう備えたらいいのか「災間」と「減災」をキーワードに考えてみた。

歴史学者の警告 「災間」で考えよ

歴史学者の磯田道史さんは、「災間」という言葉を使っている。(『『災間』を生きる』オピニオン 2015/3/10 朝日新聞)「現在は、前の災害と次の災害の間、『災間』と。

磯田さんは、日本各地にでかけて丹念に史料を調べてきた。南海トラフ大地震について次のように指摘している。「比較的記録がしっかり残っている1498年の明応地震以降の500年間を見ると、南海トラフは100年前後で動いている。150年近い間隔が空いたこともあるが、それは1回だけ。3回は90～100年前後でおきている。

私達は、震災後 年と過去を起点に考えがちだが、「 まで何年」と考えるべきではないか。つまり南海トラフで言えば、次の大地震が起きるまでの20年～30年」と考え、物事を計画すべきだ。「平和ぼけ」と言うが「災害ぼけ」のほうがずっと怖い。戦争は予知できるし人間の行為だからくい止めることができる。しかし地震や津波は止められない。「災間」にきちっと備えるべきだと。磯田さんは、「天災から日本史を読み直す」の中で富士山の宝永噴火についてふれている。

1703年に相模トラフが動き元禄関東地震、その4年後1707年10月4日(旧暦)宝永大地震、11月23日に富士山が噴火した。南海トラフと相模トラフの大地震、富士山の火山活動は連動している。

豊田九右衛門の記録(静岡県浜松市)「宝永四年亥の十月四日、昼の九つ時に大地震。高山さけ、大地がさけ、自分の屋敷、上の山組屋敷、土蔵が押しつぶされたが、家内の者に一人もけがはなく前の畑へ逃げ出した。しばらく過ぎ、津波が打ち上げてきたので山へ逃げ上がった」それから49日後、富士山が大噴火。「23日、富士山が焼け、おびただしく、こくう(虚空)鳴り響き、その夜、五つ時、東の方に火出で空を飛び散り、何とも知れず、ただ火の雨降り、世界も今滅するかと、女・わらべなき騒ぎ申し候」。大地震の後、津波が襲い、そして富士山が噴火した。

金五郎の記録(愛知県田原市)「富士山と足高山(愛鷹山)の間に、須走と言う所に、火穴があき、それより火災が吹き上げた、富士山より三倍の高さに見えた」「この火災に土砂が混じり、西風が毎日吹き、これより、東国に砂が降り、富士より東七カ国が潰れた。江戸も砂の厚さ四、五寸(12～15cm)も積もった。火穴近所の村里は砂の厚さ1丈(3m)も積もり田地はもちろん村里が潰れた。」

*磯田道史 著「天災から日本史を読み直す 先人に学ぶ防災」2014年 中央公論新社

4つのプレートのせめぎ合い、「変動帯」にある日本列島

日本列島にはなぜ地震や津波が繰り返し襲うのか、なぜ火山が多いのか。地球科学は、「板」(プレート)と「煙」(プルーム)の理論でこれを解明した。20世紀半ばに登場したプレートテクトニクスとそれを補足するプルームテクトニクスだ。

(以下、藤岡寛太郎「山はどうしてできるのか」より)

日本列島は、世界でも稀な4つのプレートがせめぎ合い、沈み込んでいる変動帯にある。

プレートがせめぎ合い沈み込む際、ストレスが発生する。ストレスの強さが岩石の強度を上回ったとき、岩石は破壊し、地震が発生する。周期的に日本列島に地震が発生する理由だ。

沈み込むプレート「スラブ」の中には水が含まれておりその水が地下深くで放出され、沈み込まれている側のマントルに供給される。するとマントルの岩石の融点が下がり、溶けやすい成分が溶け始めマグマがでる。このとき、地下約110kmの深さでマントルをつくるかんらん岩がいっせいに溶け出してマグマが形成されるので地表から見ると1本の線のように見える。この線を「火山フロント」と呼んでいる。日本列島にはこの火山フロントが何本も走っている。

関東から中部にいたる地域は、複雑な構造をしている。北へ向かうフィリピン海プレートの下に太平洋プレートが沈み込んでいる。ここでは北米プレートにフィリピン海プレート、さらに太平洋プレートという3つのプレが重なっている。しかも東北マイクロプレートには西からユーラシアプレートが沈み込んでいる。

富士山は、複数のプレートが沈み込む場所のできたゆえに美しい成層火山となった。富士山は、山体の下に3つの山体が隠れており、4階建ての構造だ。

巨大都市東京もこのプレートが重なりあう複雑な構造の上にある。大地震や富士山の噴火が、戦後70年、たまたま起きていない「災間」にあたった時期に経済成長をとげ、巨大都市圏となった。

*藤岡寛太郎著「山はどうしてできるのか ダイナミクナ地球科学入門」2012年 講談社

*藤岡寛太郎・平田大二編著「日本海の拡大と伊豆弧の衝突」2014年 有隣堂

巨大都市は、災害には脆弱

東京を中心とした巨大都市圏は、世界最大だ。3千7百万の人口。産業の集積地であり、鉄道、高速道路がこれを結ぶ。一度、巨大地震や大津波が襲ったらどうなるか。巨大都市は、災害には脆弱だ。現在でも少しの水害で数万人の帰宅困難者が発生している。

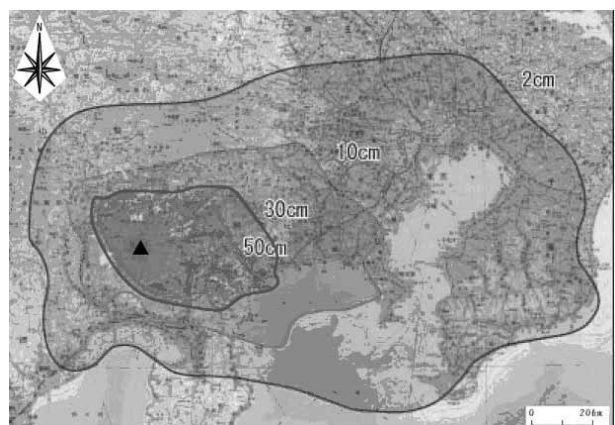
鎌田浩毅さんがハザードマップにもとづいて富士山が噴火した時の被害を想定する。(「富士山噴火」)とりわけやっかいなのが火山灰だ。火山灰が首都圏に降りそそいた場合、送電線が使えなくなることや電子機器に障害が発生することが予想される。鉄道が止まれば数百万の帰宅困難者が発生する。航空機も飛べなくなり羽田、成田、横田等の飛行場も使えなくなる。さらに上下水道の機能も著しく失われ数千万人の生命活動を脅かすことになる。電子化された巨大都市は、災害に弱い。

最悪なのは、山体崩壊だ。これが発生したら静岡県側にも山梨県側にも山津波となって押し寄せる。

*鎌田浩毅「富士山噴火 ハザードマップで読み解く『Xデー』」2007年 講談社

*富士山火山防災マップ - 富士山火山防災協議会

http://www.bousai.go.jp/kazan/fujisan-kyougikai/fuji_map/



(火山灰の予測 ハザードマップより)

災害に強いまちづくりを

ではこれにどう備えるのか。国土交通省は、2014年3月に「国土のグランドデザイン」を発表した。人口減少、災害等の新たな要因を考慮し、2050年のあるべき姿をデザインしたとしている。(地方)においてはコンパクトシティをかかげ、3大都市圏を結びスーパー・メガリージョン＝超巨大都市圏の形成を打ち出している。気になるのは、このスーパー・メガリージョンだ。東京、名古屋、大阪を結びさらなる超巨大都市圏を作る。リニア中央新幹線を盛り込んでいるようだ。

集中と集積は巨大な利益をもたらす。しかし巨大都市は災害に脆弱だ。来るかこないか分からない数百年に一度の地震や津波、火山噴火に巨額の費用を使って備える必要があるのか、という意見もある。しかし、大地震や大津波、火山噴火は必ず発生する。南海トラフ大地震でいけば、「20～30年の間に発生する」のであり、これに備えるのは最優先事項だ。「成長戦略」と浮かれている場合ではないのだ。

「減災」という考え方が定着してきた。最優先で守るべきは「かけがえのない命」。そして、経済的・文化的被害をいかに少なくするか、優先順位をつけて備える。

「自助」自らの命は自らで守る。子ども達へ地震や水害から自分の命を守る力を教え訓練する。「共助」ご近所や地域での助け合いを日頃から育ておく。「公助」行政の役割を確認し強化しておく。そして社会のデザインを「持続性」と「多様性」「分散」「市民参加」こそキーワードにする。

*「国土のグランドデザイン2050」

http://www.mlit.go.jp/kokudoseisaku/kokudoseisaku_tk3_000043.html

「災害ボケ」の原発再稼働

国民の生存権を脅かす、核自爆装置だ

忘れてはならないのは列島に林立する原子力発電所だ。福島第一原発4号機の危機は、原発が稼働していなくても危険であることを私達に気づ

かせた。4号機の燃料プールが崩壊したら、首都圏3千万人への避難命令が出る一步手前だった。

*田坂広志「官邸から見た原発事故の真実 これから始まる真の危機」2012年光文社

全国の原子力発電所の燃料プールには、使用済燃料がぎっしり詰まっている。核燃料リサイクル工場のもを含めると1万7千tの使用済燃料が保管されている。地震や津波、火山噴火によって送電線が使えなくなったら、燃料プールが崩壊したら、国民の命、くらしを奪う存在となる。

停止中の浜岡原発では、静岡県で要求で中部電力は、乾式の保管施設を建設中だ。少しでもリスクを低くするためにすぐにすべきことがある。

電力会社は、原発の再稼働を急いでいる。今だ収束していない福島第一原発事故。汚染水すらコントロールできていないことを忘れてはならない。「災害ボケ」、いや目先の利益を優先し、国民の生存権を脅かす犯罪行為とも言える。

地震・津波・火山噴火は、日本列島に住まうものにとっての宿命だ。

原発は、変動帯にある日本列島では、「民族」の核自爆装置になりかねない。

スクラップから

14年連続減少 交通事故死

2014年の交通事故死は4,113人で、前年より260人少なく14年連続の減少となった。

過去最悪の1970年の1万6765人と比較して4分の1以下に。自動車がまだ普及していない1949年以来の低水準だ。1949年には2万5,113件の事故で3,790人が亡くなったのに対し、2014年は57万3,465件の事故で4,113件と、事故発生件数に対する死亡者数の比率は20分の1以下に低下している。事故対策の結果、減らすことができたといえる。

ワースト1位 愛知県 12年連続で交通事故死(204名)。2位は、(185人)神奈川県。(警察庁発表より)

米国31%+ロシア27%=58%

世界の武器輸出量、各国シェア 2010～14年(2005年～09年) 1位 米国 31%(29%)
2位 ロシア 27%(22%) 3位 中国 5%(3%)
ドイツ 5%(11%)。米国とロシアだけで世界の半分以上の武器輸出を行い、しかも増加しているという。彼らの作り出す危機は、人々の命と暮らしを奪う一方、軍需産業を潤す。「平和国家」日本もこの「積極的平和主義」をかかげてこの「死の商人」の仲間入りをしようというのか。

* SIPRI ストックホルム国際平和研究所 2015/3/16

戦争になってもイモでカロリーは確保できる?!

農水省は、食料自給率目標(カロリーベース)を50%から45%に引き下げるといふ。そして新たな指標として「食料自給力」を導入した。戦争などで輸入が止まっても、コメ中心からイモ中心に生産を切り替えれば、国民が生命を維持する上で必要なカロリーは確保できる、というのだ。

農水省「食料・農業・農村基本計画」(案) 2015/3/17

賀川豊彦の『一粒の麦』が再版

1983年に社会思想社が発行した文庫本を最後に絶版となっていた賀川豊彦の『一粒の麦』が再版された。イエスの友会三河支部や生活協同組合(旧みかわ市民生協)の関係者らの努力によるもの。

ご希望の方は、(賀川豊彦「一粒の麦」を再販する会) 鈴木貞男さんへ

TEL&FAX 0532・52・8757(鈴木さん)

1冊900円 +送料 290円